

(二〇一九年度一般入試B問題)

国語問題 (六〇分) (この問題冊子は八ページである。)

受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、携帯電話・PHSの電源は切ること。
- 三、時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、解答用紙は二枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分に何も書いてはならない。
- 六、監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、上に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以上

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

ひとはどのように人生を歩むべきか。

この問いには、いろいろな回答を与えることが可能だろうが、人生をよりよく歩むには「教養を身につけること」が大切だ、という見方を提案してみたい。

教養なんて、人生にとって飾りのようなものに過ぎないではないか、という反論もあることと思う。(ア) きびしい 人生を渡っていくには、教室や本で学んだ教養なんかより、実生活での経験や人付き合いから学ぶことの方がはるかに重要ではないか。短大や大学での高等教育機関での学びにしても、重要なのは社会に出てすぐに役に立つような専門的な知識や技能の習得であって、一般教養なんてお遊びみたいなもので、ほとんど役に立たないのではないか。こんな意見もあることだろう。

(あ)、生きていく上で、経験や人付き合いが重要なことは言うまでもない。専門的な知識や技能も、複雑な現代社会のなかで職を得て生きていくには不可欠のものだろう。しかしだからといって、教養を軽視してよいということにはならない。教養はいまの日本の社会では不当に軽く扱われているが、実はとても大切なものなのだ。

教養は、なぜ大切なのか。それを説明するには、(い)、教養とは何かを改めて考えてみなければならない。

教養とは、雑学的な知識をたくさん記憶していることとイコールではない。細かな知識をどんなに持っていたとしても、それだけで教養があるとは言えない。例えば、知識の豊富さを鼻にかけ、独善的な態度をとって相手を見下すようなところがあれば、私たちは、そうした人を教養ある人と呼ぶことに戸惑いを覚えるはずだ。必要もないのに人前で自分の知識をひけらかし、相手をバカにして不快な思いをさせたり、豊富な知識を悪用し、他人を騙し

て金儲けしようと思んだりする人のことを、私たちは教養ある人とは決して言わない。教養を身につけるとは、私利私欲の充足を最優先したり、自分だけの世界を肥大化させたりするのは全く反対のベクトルをもつ態度なのだ。

世界は広く複雑である。世界には自分の知らないことがたくさんある。この自覚を持つことが、教養には不可欠である。自分の専門とする領域について、いかに詳しい知識や技能をもついても、それで満足してしまい、それ以外の世界に目を向けようもしない人は、教養ある人というより、専門領域しか知らない人というべきである。教養とは、自分にとっていかなる知識が大切であるかを常に問い続け、それを探し求めるとともに、手に入れた知識を活かして、自分が世界のなかでいかなる存在であるかを問い質すことができることなのである。教養ある人とは、自分を外部へと開き、外部との交流を通して、自己理解を不断に (1) 更新し続けることのできる人を意味する。そう考えてみれば、教養とは、決して単なるお飾りではないことが分かってもらえると思う。

短大や大学のカリキュラムには、教養教育科目群が設けられている。教養科目とは、専門科目を (2) 履修するに先立ち、私たちが生きている世界全体についての基本的知識を習得するための科目である。専門科目を学ぶための下支えになる、いわば準備段階の知識を提供する科目とも考えられるため、ともすると教養科目は、専門科目より理解が容易で、その分レベルが低いと考えられがちである。しかし、そのような考えには、誤解が含まれている。なぜなら、教養の知識は、専門科目に (イ) じゅうぞく しているわけではなく、知の全体性と統合性を志向する点で固有の価値を持つているため、専門科目を履修した段階でお役御免になるわけではないからである。(ウ)、さまざまに専門的知識を習得した後にも、それらの知識を人生全体のなかに位置づけ、それら相互の関係を理解し、統合的な知へと高めていくために、できれば高学年向けに開講されている教養科目を履修することが望ましい。教養教育は、短大や大学の教育課程のはじめの時期に履修するだけで十分というわけではなく、高学年になっても、さらには学校を卒業した後も継続されるべきものである。

教養がそのようなものであるならば、生涯にわたって教養を高めていく習慣を身につけることが肝要である。教養科目は、まさにこのような習慣を身につける（ウ）かつこうの機会を提供するものである。教養科目の目的は、幅広い基礎知識を獲得するということだけではない。自分だけの狭い世界に閉じ籠るのをやめ、世界のなかで起きているさまざまな出来事へと関心を広げること、それらの出来事の背景や理由を知りたいという意欲をかきたて、知りたいことを知るための技法（ここには、文献（3）検索の方法、インターネットの活用法、本の読み方などが含まれる）を習得すること、さらに実際に調べて分かったことを分かりやすく書き記し、他人にそれを明確に伝える力を身につけること、こうした能力の育成もまた教養科目の重要な目的なのである。社会人としての基本的な素養を養う機会にもなるのだから、皆さんが教養科目を履修する際には、どうすれば楽に単位がとれるかではなく、こうした力を身につけるためにはどのように努力すればよいかということに、ぜひ注意を払ってほしいと思う。

皆さんのなかには、単位を取り、できればいい成績を修めて、いい学校に入ることが勉強の目的だ、と考えている人もいるかもしれない。もしそうだとしたら、いい学校に入った段階で目的は達成できたのだから、手に入れた知識は捨てても構わないということになる。しかし、それは根本的に間違った考えだ。教養とは、人生の困難を切り抜け、自分の人生をより豊かなものにするために欠くことのできないものだからである。教養を身につけるとは、複雑で不確実な世界のなかで自分を見失わずに生きていくための知を自分の味方につけることなのである。

決して独りよがりにならず、自分を世界のなかに位置づけて理解できるようにすることが、教養の目的である。教養ある人は、自分の価値観を絶対視して、他人に押し付けようとするとはしない。教養を身につけるとは、現代社会のありようについて幅広く他者と常識を共有することでもある。教養のミニマムは①常識であり、常識とは他人と共有可能なものだからである。もちろん常識の内実は、時代により、また社会により異なる。

（え）、他者とともに常識を共有することは、教養の必要条件ではあるが、常識を持っているからといってそれだけで教養があるとは言いきれない。特定の時代や社会の常識に大きな歪みが認められる場合もあることだろう。そうであれば、常識を身につけるだけでなく、常識から距離を取り、

常識を相対化する視座を獲得することも必要になってくる。その意味で、教養とは、自分とは異なった考えや価値観に関心を持ち、それを理解できるようにすること、易しく言い換えるなら、他人の気持ちが分かるといふことでなければならぬ。

では、そうした教養を手に入れるにはどうすればよいのだろうか。いろいろな方法が考えられるだろうが、人類の知的遺産と目されている、多様な時代と社会の古典的著作にできるだけ多く親しみ、それをじっくり読み、その価値を深く知ることを推奨したいと思う。それによって、私たちが今生きている世界を理解するための座標軸をいくつも形成しうるようになり、ともすると自己中心的になりがちな自分自身のまなざしの偏りにも気づくことができるようになるからである。教養とは、多様な価値観へと自分を開き、一つのことを複眼的に見る力を養うことであり、世界を動かしている力や価値観がどのようなものであるかを自覚すると同時に、その限界をも見定め、より（エ）ほうかつ的な価値観を探し求めながら創造的に生きていくことなのである。

中世ヨーロッパの大学では、今日の教養科目に相当する科目は、リベラル・アーツ（自由学芸）と呼ばれた。それは、文法学、修辞学、弁証法のほか、算術、（4）幾何学、天文学、音楽といった七つの科目によって構成されていた。それらは自由七科とも総称されたが、そのように呼ばれたのは、これらの科目が、法学や医学などのプロフェッショナルな専門知識を身につけるための基礎をなすだけでなく、法学や医学などのいわゆる実学が抱え込まざるをえない利害関係から（2）自由になり、あくまで純粹に真理を追究しようとする姿勢を習得できると考えられたためである。それらの学科は、具体的な実利的目標に直に結び付けられてはいないため、すべてを損得勘定で考えるような悪癖を乗り越え、必然性と普遍性をもつ真理をそれ自身のために探究しようとする自由な精神を育むものと期待されたのである。

（お）、今日の私たちの社会では、効果が見通せず、有用性を欠くと判断されたものは、すぐに無価値と見なされてしまう短絡的な傾向が（5）顕著である。しかし、（A）それ自身として魅力のあるものは、何かのために直ちに役に立たなくても、それだけで価値がある。教養とは、役

に立つこと以上に大切な価値があることを知らしめ、狭い価値観への囚われから私たちを解放してくれるものなのだ。

このように述べることで、私は、教養が役に立たないということを手放したくないのではない。教養は、有用性や効率といった価値よりも高い価値を教養えてくれるだけでなく、実はきわめて役に立つものでもあるのだ。一つだけ具体例を挙げて説明しよう。

ヴィクトール・フランクルというユダヤ人精神科医は、第二次大戦中、ナチスの手によって強制収容所に連行され、想像を絶する日々を送る。どれほど強制労働が理不尽で過酷なものであろうと、いつかここから出られるときが来るはずだという希望があれば、その辛さに耐えることもできよう。だが希望は絶望と隣り合わせである。解放されるのではないかと期待されたクリスマスがやって来ても事態が全く変わらないことに気づいたとき、絶望ゆえの自殺が多発する。そうでなくとも、栄養失調や病気で働くことができなくなるとガス室送りになる仲間たちの姿をいやというほど見せつけられては、生きる気力をどのように維持したらよいか分からなくなる。仲間たちからは、もう人生には何も期待できなくなったという声も聞こえてくる。

そのとき、フランクルは、こう考える。「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれは 기대できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならないのである」『夜と霧』、霜山徳爾訳、みすず書房、一九六一年)。このように考えることで、フランクルは、仲間たちを自殺の誘惑から守ったのである。この発言の背景には、苦難のときにも神への信仰を捨てず、状況の意味を絶えず新たに問い求めようとしたユダヤ教の伝統が息づいていると考えられる。フランクルは、その伝統に根ざした教養によって、仲間とともに生き延びることができたのである。世界のなかに自己をどのように位置づけることができるのか、そこに人間の自由がある。その自由を与えるものこそ、教養なのである。

教養は決して単なるお飾りではない。生きること、そして、よく生きること(オ)しするものなのだ。

(B) ひとはどのように人生を歩むべきか。あなたならこの問いにどう答えるだろうか。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。送り仮名のあるものは送り仮名も書きなさい。(配点各一点)

問三 傍線部(あ)から(お)の空欄に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

- A. ところが
- B. もちろん
- C. そのため
- D. まず
- E. むしろ

問四 傍線部①常識に関する筆者の意見と異なるものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A. 常識は、他人と共有可能なものである。
- B. 常識は、教養の十分条件である。
- C. 常識は、時代と社会に相対的なものである。

D. 常識は、常に正しいとは限らない。

問五

傍線部②自由という言葉について、最も意味の近い用例を、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A. 自分のお金なのだから、どのように使おうと自由だ。
- B. 自分で自分を律することのできるからこそ、本当の自由である。
- C. ようやく監禁状態から解放されて、自由の身になった。
- D. 都合がいいか悪いかといったことから自由に、物事を判断すべきだ。

問六

筆者の「教養」に関する意見に最も近いものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A. 教養は、豊富な知識を身につけることであるが、その知識は実用的ではない。
- B. 教養は、既存の価値観を客観視し、ものの見方の偏りを是正する力である。
- C. 教養は、高等教育機関において最初の時期に学ぶべきものである。
- D. 教養は、自尊心を高めるために必要不可欠である。

問七

傍線部(A) それ自身として魅力のあるものは、何かのために直ちに役に立たなくても、それだけで価値がある、という筆者の主張の意味するところを、あなた自身が考えた具体例を一つ挙げながら、五〇〜六〇字で説明しなさい。(配点五点)

問八 傍線部（B）ひとはどののように人生を歩むべきか。あなたならこの問いにどう答えるだろうかについて、まず（1）筆者の意見を五〇字から六

〇字でまとめなさい。次に（2）あなたの考えを一五〇～一六〇字で述べなさい。（配点十五点）